大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ウィリアム・バードと植民地社会の安定(最終記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 滝野, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011023

ウィリアム・バードと植民地社会の安定

滝　野　哲　郎

ヴァージニア植民地において、社会の秩序が比較的安定するようになったのは、18世紀に入ってからのことである。それ以前、この植民地は、長年にわたって、飢餓・疫病・先住民の襲撃・内乱など様々な混乱と動揺を経験してきた。1680年代になると、秩序を乱す要因が徐々に減少しはじめ、18世紀初頭には、プランターが台頭する社会ができあがっていた。タバコ栽培などで富を築いたプランターが、植民地社会の上層階級を形成し、政治で強い権力を握るようになったのである。[1]

ヴァージニア植民地の指導層は、社会の秩序と安定を維持することに努めていたが、ときにはそれを脅かすものもあらわれた。とりわけ、外国軍による侵略・先住民との紛争・黒人奴隷の反乱は、植民地にとって大きな脅威となりうるものであった。この小論では、ヴァージニアの政治にかかわっていたプランターの一人、ウィリアム・バード二世をとりあげ、彼がこのような脅威をいかにとらえていたかを検討し、安定と脅威の交錯する植民地社会の情況について考察してみたい。

1

18世紀前半、タバコ・プランターであったウィリアム・バード二世は、ジェイムズ川沿いのプランテーション、ウェストーヴァーで暮らしてい

『女子大文学　英語学英米文学篇』（大阪女子大学紀要）第6号、2005年3月

た。そこから東へ50キロいったところに、植民地の首都ウィリアムズバーグがあった。バードは、政治に関する用件を果たすために、よく馬にのってでかけていった。ここでまず、バードの植民地政治とのかかわりについてみておこう。

バードは、ヴァージニア生まれの第二世代の植民地人である。父親バード一世は、1652年、ロンドンの金細工師の息子として生まれ、17歳の頃、ヴァージニア植民地に移り住んだ。母方の叔父が、現在のリッチモンドの辺りで先住民との交易の仕事をしていたので、彼をたよって来たのである。1670年、叔父が他界すると、事業を引き継ぎ、3千エーカーの土地を手に入れた。そしてその3年後に結婚し、相手は、クロムウェル政権のイギリスから逃れてきたイギリス王党派貴族の娘メアリ・ホーズマンデンであった。ちょうど同じころ、メアリのいとこも、ヴァージニア植民地の総督ウィリアム・バークリーと結婚している。こうして、バード一世は、相続と結婚によって数年のうちに植民地社会での成功への足場を築き、まもなく、植民地議会の議員となって政治にかかわるようになった。また、交易の仕事だけでなく、タバコ栽培のプランテーションを経営し、プランターとして着実に収益をあげていった。17世紀後半は、カーター、リー、ランドルフ、ベヴァリー、ハリソン、メイソンといった家系が台頭しはじめ、ヴァージニアの上層階級が形成された時期である。バード一世も、その一員として、植民地の社会と政治に強い影響力をもつようになっていったのである。[2]

ヴァージニア植民地の政治組織は、当時、総督・参議会・代議会から成り立っていた。イギリスの王領植民地であったヴァージニアでは、総督は本国から派遣されたが、参議会の議員は総督によって選ばれ、代議会の議員は各郡から住民の選挙によって選出された。これらの議員の選出には、資産と家柄が重んじられ、とりわけ、参議会は植民地の有力プランターによって構成された。参議会は、議会の上院としての役割、また、総督を補佐して行政や司法の仕事を担っていたが、ときには総督や本国政府と対立することもあった。とくに1690年代から1710年代にかけて、参議会は植民地政治において非常に強い指導力を発揮した。[3]

バード一世は、1677年に代議会議員、その4年後に参議会議員に選出され、そののち植民地収入役と監査役の職をも兼ね、晩年には参議会議長となった。1704年、彼が他界すると、長年イギリスに滞在していた長男バード二世が帰国、財産と土地を相続し、プランテーション経営を引き継ぎ、植民地政治にもかかわるようになった。すでに一時帰国した1696年に代議会議員を経験していた息子のバードは、まもなく父親の植民地収入役の職を引き継ぎ、1709年には参議会議員となった。1709年9月、「参議会にでむいて、そこで参議会の一員となることを宣誓した」バードは、「どうか名誉と良識のある立派な議員となれますように」と日記に記している。当時のヴァージニア植民地では、有力なプランターが公職につくことは、義務であり、かつまた特権であり、それは名誉なことであると考えられた。バードは、たとえプランテーションの仕事が多忙であろうと、議会開催日や政治の用件があるときには、かならずウィリアムズバーグにでかけていった。当時、参議会は、ロバート・カーター、ベンジャミン・ハリソン、フィリップ・ラドウェル二世といった有力プランターたちが名を連ね、植民地政治における発言力も強く、総督アレグザンダー・スポッツウッドと対立することも多かった。その後、バードは、参議会においてしだいに影響力をもつようになり、晩年には議長となっている。[4]

有力なプランターは、ヴァージニア植民地を防衛する民兵組織において重要な役割を担うことが多かった。植民地の総司令官であった総督のもとで、バードは、民兵隊大佐として、ヘンリコとチャールズシティ両郡の民兵を指揮する立場にあった。当時、民兵隊は、16歳から60歳の自由な（年季契約奉公人や奴隷ではない）男性によって組織され、その数は植民地全体ではおよそ9500人、ヘンリコ郡にはおよそ350人がいた。民兵は、日頃から地域の部隊ごとに訓練をおこない、年に一度、全員が郡司令官のもとに召集された。[5]

バードは、1711年9月、指揮下の郡の民兵隊が集合したときの様子を日記に記している。馬にのってその場所に着くと、すでにいくつかの部隊が到着していた。バードは彼らを閲兵する。翌日には、さらに多くの

部隊が到着、兵士たちは、「りりしく見え」、「私にまるで王にたいするような敬意を払った」のである。そして、再び閲兵。多数の民兵が集まっておこなわれたこの日の行事は、郡司令官であったバードにとって、自分の威厳が際立つ晴れ舞台でもあった。[6]

日記には、日頃の訓練についても記されている。「私は兵士たちを一列に並ばせ、賞品に向かって走らせた。ランドルフ大尉の兵士ジョン・ハチャーがピストルを獲得した」。兵士の意欲をかきたてるために、訓練に競技的な要素も取りいれていたのであろう。また、ときには、民兵の声に耳を傾けることも必要であった。ジェイムズタウンに一週間派遣された民兵たちが、「作物や家族のことが心配になり、帰宅したいと訴えた」こともあった。日記には、指揮官として民兵組織の統率に熱心に取り組む姿、人びとからの「敬意」に応えようとする彼の姿が映し出されている。[7]

18世紀前半にあって、有力なプランターの一人であったバードは、参議会議員と民兵隊大佐としての務めをはたし、ヴァージニア植民地のために尽くすことが自らの責務であり誇りであると考えていたのであろう。もし植民地に危機がおとずれたときには、社会の安全を確保するために、それに鋭意対処しなくてはならない立場にあったのである。

2

大西洋岸に沿ってひらけたイギリス領植民地は、17世紀の植民当初より、フランスやスペインなど外国勢力との対立や紛争に直面し、つねに侵略の危機にさらされていた。ヴァージニア植民地でも、1711年、フランス軍侵攻の危機に突如みまわれた。郡民兵隊指揮官であったバードは、急遽、戦闘の準備に追われることになった。日記にはそのときの情況が記されている。

8月15日、バードは、いつもと変わらない朝の時間を過ごしていた。「朝食に紅茶を飲み、パンにバターをつけて食べる。今朝は、すこし目まいを感じるが、気分はかなりよくなった。フランス語の本を読む。今日

はまた涼しくなり、北の風。便通は一日一度きちんとある」。ところが、「午後、総督から手紙が届き、それによると、この地にむかって14隻のフランス軍艦が接近しており、侵略される恐れがある」。「指揮下の民兵全員の準備を整えるように」との命令があり、すぐに二人の下士官に指令をだして、民兵を召集する。[8]

それから、戦闘の準備をすすめる日々がつづく。8月23日、総督からの知らせによると、「フランス軍艦2隻が何隻かの船舶を従えてあらわれた」。ただちに「ジェイムズタウンの砲台要員として各郡から25人の砲手を派遣するようにとの命令があった」。緊迫感が増す。その夜、「妻はおびえて、なかなか寝ようとはしない。だが、なんとか彼女の気持ちを落ち着かせて床につかせることができた。しかし、今度は自分が眠りにつくことができない。現在の情勢、そして自分の任務のことが頭をよぎる」のである。[9]

翌朝、6時に起きるとすぐに、指令をだし、銃と弾薬の用意をし、家の貴重品をより安全な場所へと運ばせる。そして、敵艦があらわれ次第ただちに報告するように指示をだす。「自分の銃の準備はでき、弾薬入れの用意もできた」と一息つくと、ようやく食事、ハトの料理を食べる。午後、近所のハリソン夫人と娘が心配して訪ねてきた。バードは、これまでの情報を伝え、「危険が近づけば、すぐに知らせ、あなたたちを守る」といって安心させる。[10]

26日、届いた手紙によると、ついに「フランスの軍艦15隻を中心とする船団が岬の内側にはいり、数千人の兵士が東海岸に上陸した」。だが、バードには、「これがすべて事実であるようには思えない」のである。27日、バードは、戦闘準備の進み具合、民兵たちの状態を点検する。兵士たちはみんな「意気盛んにみえ」、その場の隊長に「兵士の士気をさらに高める」ように告げる。知らせによると、「7隻の船がジェイムズ川をのぼりはじめた」。ただちに民兵を下流の方にむかわせる。家に戻ると、ハリソン夫人が不安な面持ちで待っている。[11]

28日、地域一帯に警報が発せられ、臨戦体制がとられる。ところが、そのようななかで届いた知らせによると、川をのぼってくるのは、フラ

ンス軍ではなく、実はイギリスの軍艦であるという。「何かおかしい感じはしていたが、やはりそのとおりだった」。「すべてはまた平静に戻った。神に感謝」と一息つくバードである。結局、誤った情報によって植民地全体が緊迫することになったのであるが、この出来事から、植民地防衛のために、政府や民兵組織がいかに機敏に動いたかをみてとることができよう。[12]

では、実際、当時のフランス軍の脅威とはどのようなものであったのだろうか。17世紀から18世紀にかけて、イギリスは、フランスとのあいだで北アメリカの領土をめぐって争っていた。イギリスがアメリカ東海岸に植民をはじめたのにたいして、フランスは、カナダのセントローレンス川流域から西方に進出し、五大湖周辺からミシシッピ川をくだって、18世紀初頭までに河口のメキシコ湾まで到達し、ちょうどイギリス領植民地を囲むかたちで北アメリカで勢力を保っていた。[13]

1689年以降、英仏のあいだでは、ハドソン湾地方をはじめとして、領土をめぐる紛争が続き、1710年にはイギリス軍がノヴァスコシアを攻略した。バードが日記にフランス軍侵攻の危機について記していた1711年にも、英仏は戦争状態にあった。実際に両軍が衝突していたのは、ヴァージニアからはるか北方、現在のカナダであったが、日記の記述からは、南部植民地でもフランスの脅威を身近に感じている様子がうかがえる。こののち、英仏の対立は、1713年のユトレヒト条約によって一時的ではあるが決着する。そしてイギリスは、ニューファンドランド、ハドソン湾地方、ノヴァスコシアを領有することになった。

1720年代になると、バードは、イギリス領植民地の西方においてフランスによる侵略の可能性があることを指摘している。当時、フランスは、ミシシッピ川流域からその支流オハイオ川流域に進出していた。ウェストーヴァーから「500マイル以上離れたミシシッピ川の支流地域を見てきた」使用人の情報をもとに、バードはつぎのように考える。「この川の支流には、多数のインディアンが暮らしていて、もし彼らがフランス側につくようなことになれば、イギリス領植民地にとっては非常に危険な事態となる」。[14]

フロリダのスペイン勢力も気がかりな存在であった。イギリス領植民地の南端はたえず彼らの侵略の脅威にさらされ、その対策として、イギリスは、1732年にジョージア植民地を設立し、緩衝地帯としての役割を担わせたのである。その設立者ジェイムズ・オグルソープは、フロリダのセントオーガスティン攻略を計画する。1740年、バードは、この計画に関して、ヴァージニアの総督ウィリアム・グーチにつぎのように書き送っている。ヴァージニアは、「財政的な理由で派兵はできない」が、戦いには、イギリス領植民地の兵士だけでなく、「多数のインディアンがスペイン人を打ち破るためにすすんで加勢してくれるだろう」。結局、この戦いでは、ジョージアとカロライナの兵に、クリーク族などの戦士が加わって、セントオーガスティンを攻撃したが、敗退してしまうことになる。[15]

このように、18世紀前半、イギリス領植民地にとってフランスとスペインは大きな脅威であった。ヴァージニアでも、これらの国からの攻撃の可能性はあり、民兵組織はそれにたいする備えとしても機能していた。ただ、バードが、「数千人の兵士が上陸した」と聞いても「これがすべて事実であるようには思えない」と日記に記しているように、イギリス領植民地におけるヴァージニアの地理的位置からすれば、突如大規模な外国軍の攻撃を受ける可能性はそれほど高くはなかったこともたしかであろう。結局のところ、18世紀前半のヴァージニア植民地は、外国勢力の攻撃をうける可能性はあったが、侵略に直面することはなかったのである。だが、もちろん、ヴァージニアが無事でさえあれば十分というわけではない。この植民地の安全は、他のイギリス領植民地の安定があってこそはじめて可能である。バードがいうように、フランスとスペインに対抗して、「北アメリカ大陸における大英帝国を、ノヴァスコシアからフロリダ湾まで拡大する」ことによってこそ、イギリス領植民地全体の安全と安定が確実に維持できるのである。[16]

3

18世紀初頭、ヴァージニア植民地内に暮らしていた先住民インディアンは、パマンキ、チカホミニ、サポニ、ナタウェイなど9部族、およそ700人であった。17世紀と比較すると、これら先住民の人口はかなり減少し、白人と先住民のあいだには大きな紛争も生じることなく、比較的平穏な関係が保たれていた。1715年、イギリス本国で植民地政策を担当していた通商拓殖院への報告のなかで、バードは、ヴァージニアではインディアンとのあいだに問題は生じていないと述べている。[17]

ウェストーヴァーで暮らすバードは、ときどき、近辺の先住民と接する機会があった。日記には、バードの屋敷に先住民が訪れたことが記されている。「パマンキ・インディアンが12人やってきた。食物とラム酒を与え、川の向こう岸まで船でおくった」。「ナタウェイ・インディアンが何人かやってきて、ダンスを踊っていた」こともあった。また、バードが自ら先住民を訪ねることもあった。「パマンキ・インディアンのまち」では、朝から雨がふり、「一日中インディアンの小屋から出ることができなかった」が、「楽しい時間を過ごすことができた」。そこでは、「妻が20人いるインディアン」や「ガラガラヘビに噛まれたが、毒消しで回復しつつあるインディアン」を目にするなど、興味を引くことも多かった。先住民と良好な関係を維持することは、交易の仕事にかかわっていたバードにとって大切なことであった。[18]

このような18世紀の情況とは異なり、それ以前の17世紀において、先住民の存在は植民地にとって大きな脅威ともなった。1622年、オペチャンカナウ率いるパウアタン族が、ジェイムズタウンを襲撃、白人1200人の約3分の1を殺害した。1644年、年老いたこの族長は、再び戦いを挑んだ。ともに白人側の勝利に終わったが、植民地は多数の死傷者をだし、多大な被害を被ったのである。先住民側も、戦いのたびに人口が減少し、残ったものはしだいに奥地へと追いやられることになった。[19]

17世紀後半、ヴァージニア植民地では西方への開拓がすすんでいた。プランターのなかには、条件のよい土地を買い占め、プランテーション

の拡大や土地投機を考えるものがいた。このため、年季明けの奉公人や貧しい農民は、自らの土地を確保することがしだいに困難になり、西方にむかうようになった。そして、彼らは先住民の土地に侵入するようになった。先住民とのあいだで対立や紛争が生じると、移住者は植民地政府にその対策を求めたが、総督や指導層は、先住民との交易の利害もあって、この問題に積極的にとりくむことはなかった。

折しも、ヘンリコ郡で先住民との対立から移住者が殺害される事件がおこった。移住者たちは総督バークリーに軍隊の派遣を訴えるが、バークリーは、毛皮取引にかかわっていたこともあり、先住民との融和を重んじる方針をとった。こういった政府の先住民政策への不満に端を発して、1676年、大規模な内乱「ベイコンの反乱」が勃発した。人びとの支持をえて反乱の指導者となったナサニエル・ベイコンは、先住民攻撃のための兵を集め、自分をインディアン掃討軍の指揮官に任命するように総督に要求した。これが拒否されるや、ベイコンは兵を引き連れ、先住民部族を攻撃したが、その多くは白人にたいして友好的な部族であった。ベイコンは、さらに、総督一派の政治支配を批判し、ジェイムズタウンに進軍してまちを焼き払った。だが、そのようななかで、ベイコンが、突然、病死したため、反乱は挫折してしまった。[20]

「ベイコンの反乱」は、先住民問題だけでなく、下層階級の不満、政権をめぐる争いなどをも要因としておこった事件であったが、先住民にとっては、多数が殺害され、奴隷にされ、また土地を奪われて奥地に追いやられる契機となった事件であった。この反乱以降、ヴァージニア植民地内では、先住民の人口が著しく減少し、その勢力もおとろえ、18世紀には先住民はもはや脅威の存在ではなくなってしまった。バードの報告にもあったように、白人側からみれば、ヴァージニアではインディアンとのあいだに問題は生じていないということになったのである。

この18世紀のヴァージニアの情況とは異なり、南北カロライナ植民地では、1710年代、先住民との対立が社会を揺るがす大きな問題となった。まず、ノースカロライナでは「タスカローラ戦争」が勃発した。タスカローラ族が、白人との対立から、1711年9月、ノースカロライナのまち

を襲撃し、200人以上を殺害した。バードは、戦争の原因はノースカロライナの交易商の行動にあるという。商人たちが取引でタスカローラ族をだまし、彼らに傲慢な態度をとり続けたので、先住民が不信と怒りを募らせていたのである。バードの指摘以外に、土地をめぐる対立もその原因のひとつであった。ノースカロライナ政府は事態の対応に苦慮していた。一方、ヴァージニア政府は、この紛争がヴァージニアへ影響をおよぼすことを懸念した。ヴァージニアの総督スポッツウッドは、タスカローラ族にたいして穏健な姿勢を示し、彼らとの交渉にも臨んでいたが、議会は、2千人の戦士を有するタスカローラ族の存在に大きな不安を抱いていた。バードの日記には、総督と議会のあいだで派兵をめぐって意見の対立があったことが記されている。1711年11月、「代議会は、インディアンとの戦いをはじめることを総督に要望し」、「参議会も、インディアンから満足できる返答がえられなければ、戦争もやむをえないと総督に助言した」。そして翌年4月、「総督は、民兵をタスカローラ族へむかわせるつもりだと私に打ち明け、まだ他言しないようにといった」。結局、ノースカロライナは、サウスカロライナとヴァージニアからの援軍、さらに、タスカローラ族と敵対していたヤマシー族などの援助をえて、勝利を収めることができた。捕虜となったタスカローラ族の多くは奴隷として西インド諸島などへ売り飛ばされ、一部は北方へ逃れてイロコイ族と合流した。[21]

1715年、今度はサウスカロライナで先住民との大規模な衝突「ヤマシー戦争」がおこった。以前は友好関係にあったヤマシー族とクリーク族にたいする戦いであった。この原因について、バードは、ここも交易商の行動に問題があると指摘する。商人たちは、先住民の家畜や作物を略奪し、彼らに乱暴をはたらき、過重な荷物の遠距離運搬を強制させたのである。バードは、こうした虐待についてはこれまで何度も伝え聞いていた。そのほかの原因としては、土地の問題、先住民と外国勢力との結びつきもあった。この戦いにおいて、サウスカロナイナは、チェロキー族を味方につけてどうにか勝利することはできたが、多大な損害を受け、財政的に逼迫した情況に追い込まれる結果となった。[22]

18世紀前半、ほかの南部植民地では、先住民との対立は大きな問題であった。戦争による犠牲者や出費は植民地を弱体化させかねない。外国勢力が先住民を利用して侵略してくるおそれもあった。ヴァージニア植民地政府は、他の植民地の情況がヴァージニアにもたらす影響を懸念していた。一方、ヴァージニア内のインディアンにたいする対策にも注意をはらっていた。当時、ヴァージニア政府は、植民地東部の友好的な部族を指定し、狩猟などの権利を認めるとともに、敵対する部族についての情報提供や、戦いへの出兵の協力を求めていた。近隣の部族と友好的な関係を保てば、敵対する部族の襲撃、そして外国軍の侵略にたいする備えともなると考えたのであろう。友好的な先住民の存在は、緩衝地帯としての役割も期待でき、植民地の安定を維持するために役立ったのである。[23]

4

ヴァージニア植民地では、1680年代以降、奴隷に関する法律がつぎつぎに制定され、黒人奴隷制が確立していった。それにともなって奴隷輸入も増加し、ヴァージニアの黒人人口は、1680年に3千人であったのが、1700年には1万6千人、1720年には2万7千人、1740年には6万人となった。こうして安定した労働力が供給され、タバコを中心とする奴隷制プランテーションが拡大していった。[24]

労働力である黒人奴隷を管理することは、プランターにとって大切な仕事であった。200人以上の奴隷を所有していたバードも、奴隷の世話と監視にはかなりの時間と労力を費やしている。ほとんど毎日、奴隷小屋やプランテーションへ足を運び、奴隷の様子、仕事の進み具合を点検している。仕事を怠ける奴隷、病気の奴隷、また、逃亡する奴隷もいた。「ユージーンが今朝逃亡した。昨日、仕事をなにもしなかったからにちがいない。捜しに行かせたが、見つからなかった」。翌日、その奴隷は連れ戻され、鞭を打たれることになった。いかに奴隷を管理するか、それがプランターの収益を左右することになった。[25]

植民地政治においても、奴隷の問題が取り上げられていた。1710年、サリー郡で奴隷が集団で逃亡を企てるが、密告によって失敗におわるという事件があった。その奴隷の処分をめぐる政府の対応が日記に記されている。4月18日、バードが出席していた参議会では、「ほかの議題よりもまず最初に、その奴隷たちを反逆罪で法廷で裁くように指示を出した」。それからの数日間、バードは裁判官の一人として法廷にいた。最初に、「奴隷たちは罪状認否を問われ」、2日後には「そのうち2人が反逆罪で有罪となった」。この事件は、未然に防げたが、植民地の白人を驚かせることになった。[26]

プランテーションのなかで生活していた黒人奴隷は、プランターにとって身近な存在であったが、増加の一途をたどる奴隷人口は、しだいにプランターに不安をいだかせるようになった。それは、外国軍や先住民のような外からの脅威とは異なり、プランテーションのなかに存在する脅威であった。バードは、1736年、黒人の増加がヴァージニアにおよぼす「多くの悪影響」について述べている。まず、白人労働者は、奴隷が増えると、畑仕事を奴隷がすることだと思うようになり、みずから労働する意欲を失う。また、奴隷所有者は、奴隷の数が多くなると、彼らを少々乱暴にあつかってもかまわないと思うようになる。だが、バードがもっとも憂慮するのは、奴隷の急激な増加が「社会にとっての脅威」となることである。「ヴァージニアには、すでに、武器を使えるような黒人の男が少なくとも1万人はいる。そして、その数は輸入と出産によって日ごとに増加している」。「もし、そのなかに絶望的な運命に憤りをおぼえ、むこうみずな勇気を持った男があらわれたならば」、暴動をおこしかねない。そして「反乱を制圧する準備が整うまでに、その男は、恐ろしい災いをもたらし、ヴァージニアの大河を血でそめることにもなりかねない」。[27]

当時、ヴァージニア植民地では奴隷の反乱はみられなかったが、黒人の人口が白人をはるかに上回っていたサウスカロライナ植民地では暴動がおこっていた。1739年9月に勃発した「ストノの反乱」である。チャールストンから30キロほど離れたストノ川近辺の奴隷20人が、白人を殺害

し、仲間を加えつつ、南方のセントオーガスティンを目指したのである。奴隷たちは、スペイン領フロリダにたどり着けば自由になれると伝え聞いていた。だが、16キロほど進んだあたりで、サウスカロライナの民兵隊に追いつかれ、反乱は失敗におわった。この事件で殺害された白人はおよそ20人、反乱に加わった奴隷は60人から100人ほどで、うち40人が死亡した。白人たちは、反乱の情況や規模の大きさに驚き、それ以降、奴隷にたいする扱いをより厳しくするようになったのである。

ヴァージニア植民地でも黒人は急増し、1740年には全人口の3分の1をしめるようになっていた。このまま増加しつづけると、ヴァージニアでも奴隷反乱が現実のものとなることをバードは危惧していた。また、奴隷の逃亡と反乱が外国勢力の思惑と結びつく可能性があることも指摘している。ジャマイカでは、山中に逃亡した奴隷が大きな脅威となったが、同じことがヴァージニアでもおこりかねない。もし奴隷がヴァージニアの奥地に逃げ込めば、フランスが彼らに武器を与えて、イギリス植民地にたいする攻撃に利用するかもしれないのである。[28]

18世紀前半、ヴァージニア植民地では、サウスカロライナやジャマイカのような大規模な奴隷反乱はおこらなかったが、逃亡や反乱の計画が事前に発覚することはたびたびあった。そして、そのような事件の発覚がきっかけとなって、奴隷の扱いを厳しくする法が制定されたりもした。ヴァージニア植民地政府は、当時、奴隷の増加を抑制する策を講じることはなかったが、管理や取り締まりを厳重にすることによって、反乱や逃亡といった奴隷の問題に対処しようとしていたのである。

5

バードは、長年にわたって、ヴァージニア植民地の参議会議員そして民兵隊大佐として、社会の安定の維持に努めてきた。1835年、彼は、ジャマイカで奴隷反乱に苦慮する知人への書簡のなかで、ヴァージニアの情況をつぎのように説明している。「このヴァージニアで、私たちは、健康と豊かさに恵まれ、心を悩ますこともなく安全に暮らしている。ここで

は、外国軍の侵略にさらされることもなく、どろぼうや強盗の心配をすることもない」。そして、その知人に、ぜひともウェストーヴァーを訪ねてもらいたいと述べている。バードは、植民地の指導者の一人として、他の植民地よりもヴァージニアが「安全」であることに誇りを抱いていたのであろう。たしかに、当時、ヴァージニアでは、先住民や外国勢力によって安全が脅かされることは少なく、プランテーションの労働力であった奴隷もそれほど大きな脅威となってはいなかった。たとえ奴隷の急増や他の植民地での戦争や混乱による影響が懸念されたとしても、ヴァージニアが比較的「安全」であったことはたしかである。[29]

バードがこの手紙を書いた1830年代、ヴァージニアのプランテーション社会は「黄金時代」を迎えていた。植民地にひろがったプランテーションで生産されるタバコは、大きな利益をうみだし、ヴァージニアに経済的な繁栄をもたらしていた。このプランテーション社会の興隆は、それまでの植民地社会の安定化があってこそ可能となった。バードをはじめ有力なプランターにとっては、その「豊かな」世界をこれから維持するためにも、植民地の秩序と安定がきわめて重要なことであったのである。

注

1 T. H. Breen, *Puritans and Adventurers: Change and Persistence in Early America* (New York: Oxford Univ. Press, 1980), 128.

2 Pierre Marambaud, "William Byrd I: A Young Virginia Planter in the 1670's," *Virginia Magazine of History and Biography* 81 (1973): 131-50; Pierre Marambaud, "Colonel William Byrd I: A Fortune Founded on Smoke," *Virginia Magazine of History and Biography* 82 (1974): 430-57.

3 Jack P. Greene, *The Quest for Power: The Lower Houses of Assembly in the Southern Royal Colonies* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1963), 22-31.

4 Pierre Marambaud, *William Byrd of Westover, 1674-1744* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1971), 205-27. William Byrd, *The Secret Diary*

of William Byrd of Westover, 1709-1712, ed. Louis B. Wright and Marion Tinling (Richmond, VA: Dietz, 1941), 82 (1709-9-12).

5 James Biser Whisker, *The Colonial Militia of the Southern States, 1606-1785* (Lewiston, NY: Edwin Mellen Press, 1997), 5-32. Robert Beverley, *The History and Present State of Virginia*, ed. Louis B. Wright (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1947), 168.

6 *Secret Diary*, 410-11 (1711-9-22, 23).

7 *Secret Diary*, 415 (1711-10-3), 396 (1711-8-29).

8 *Secret Diary*, 389-90 (1711-8-15).

9 *Secret Diary*, 393 (1711-8-23).

10 *Secret Diary*, 393-94 (1711-8-24).

11 *Secret Diary*, 395 (1711-8-27, 28).

12 *Secret Diary*, 396 (1711-8-28).

13 Allan R. Millett and Peter Maslowski, *For the Common Defense: A Military History of the United States of America*, rev. ed (New York: Free Press, 1994), 22-37.

14 "To Charles Boyle, Earl of Orrery," 1720-3-6, *The Correspondence of the Three William Byrds of Westover, Virginia, 1684-1776*, 3 vols, ed. Marion Tinling (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1977), vol. 1, 327.

15 "To Gov. William Gooch," 1740-4-1, *Correspondence*, vol. 2, 544.

16 "To Charles Boyle, Earl of Orrery," 1727-6-29, *Correspondence*, vol. 1, 364.

17 Beverley, 232. ベヴァリーによると、バード一世の所有する土地には、アポマトックス族が7家族ほど暮らしていた。1607年当時、ヴァージニア内に生活していた先住民の人口は、およそ1万5千人と推測されているが、1666年には6千人となっていた。Marambaud, 246. *Correspondence*, vol. 1, 289.

18 *Secret Diary*, 70 (1709-8-13). William Byrd, *The London Diary (1717-1721) and Other Writings*, ed. Louis B. Wright and Marion Tinling (New York: Oxford Univ. Press, 1958), 503 (1721-3-6). *Secret Diary*, 587-

88 (1712-9-23).

19 Gary B. Nash, *Red, White, and Black: The Peoples of Early America*, 2nd ed. (Englewood Cliffs, NJ: Prentice, 1982), 60-66.

20 Stephen Saunders Webb, *1676: The End of American Independence*, 1984 (New York: Syracuse Univ. Press, 1995), 3-163.

21 William Byrd, *The Prose Works of William Byrd of Westover: Narratives of a Colonial Virginian*, ed. Louis B. Wright (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1966), 302-03. *Secret Diary*, 444 (1711-11-28), 518 (1712-4-20).

22 "From David Crawley," 1715-7-30, *Correspondence*, vol. 1, 289. Millett and Maslowski, 33-34.

23 Whisker, 28.

24 U. S. Bureau of the Census, *Historical Statistics of the United States: Colonial Times to 1970*, 2 vols. (Washington: GPO, 1975), 1168. 一方、ヴァージニアの白人人口は、1680年は4万1千人、1700年は4万2千人、1720年は6万1千人、1740年には12万人であった。

25 *Secret Diary*, 46 (1709-6-10).

26 *Secret Diary*, 167-68 (1710-4-18, 19, 21).

27 "To John Perceval, Earl of Egmont," 1736-7-12, *Correspondence*, vol. 2, 488.

28 U. S. Bureau of the Census, 1168. "To John Perceval, Earl of Egmont," 488.

29 "To Peter Beckford," 1735-12-6, *Correspondence*, vol. 2, 464.